

隣接する栃木県と茨城県では、外国籍住民の移動が頻繁に起こっていると考えられる。実際、茨城県には2つのブラジル人学校があるが、栃木県からスクールバスを利用して通学している生徒もいる。それから、栃木県の公立中学校に通う生徒が茨城県の高校へ進学するという事例も上がっているし、その逆もしかりである。さらには、2016年度に開始した宇都宮大学外国人生徒入試を利用して、茨城県のブラジル人学校からの合格者も出ている。こうした県境を越えた外国籍住民の行き来に鑑みると、各地域で実施される支援を連携していくことに意義がある。

#### HANDS Jr.の活動を通じた学生の主体性 ～学生インタビューをもとに～

HANDS事業の中でも、学生が中心となって活動するHANDS Jr.に所属する学生たちに焦点を当てたい。学生主体であるこの組織は2013年度にスタートし、現在所属するメンバーは30名強にも上っている。主要な活動としては、進学ガイダンスや外国籍住民との交流イベントの企画・運営、夏休み期間中の宿題支援、父兄への通訳といったように、その活動の幅は多岐に渡っている。

こうした活動を通じて学生たちは、外国にルーツをもつ家族が抱える困難を具体的に把握し、支援を行う中で支援対象者とのコミュニケーションの方法や、学習支援における子どもたちへの接し方を模索し体得してきたと言える。そもそも学生自身が多様な背景をもっており、自身も外国にルーツをもつ、あるいは幼少期に来日経験をもつ者も少なくない。そのような学生たちが日本の外国籍住民の置かれた現状や課題について、学問的に学び、その学問的知識を生かし、社会貢献活動へと行動に移すことを可能とする組織としてHANDS Jr.は機能している。

困っている外国籍住民を「助けたい」、「誰かの役に立ちたい」というような様々な想いから集う学生の中には、活動を通じて支援の難しさに気づかされたという者もいる。支援を必要とする子どもたちの移住経験の有無、日常で使用する言語、学習進度に起因する支援のニーズの多様性があげられよう。具体的には、日本の公立学校に通う児童生徒で、日本語の日常会話に支障がない者は、学習上の問題が顕在化しにくいいため、より注意深く個々人の弱点を見抜く能力が求められる。確かに、筆者が見てきた児童生徒の中でも漢字テストでは暗記により良い点数を取ってくるものの、いざ漢字の意味を改めて問われると、答えられないという児童生徒は少なくなかった。

その他の学生の声には、外国人児童生徒に対し、日本語能力不足や学習困難といった否定的な語彙との結びつきから、子どもたちのマイナス面にばかり目がいていたが、支援を通して一人の子どもとして接することの重要性に言及する意見があった。支援の対象としてではなく、同じ社会に生きる者として外国人児童生徒を捉える視点は、今後の多文化共生社会にとって非常に重要な見方である。そうした捉え方がHANDS Jr.の諸活動を通し涵養されている様相が見受けられる。

#### おわりに

現場での活動を通し、日本社会で困難を抱える外国籍住民一人一人に寄り添い、自分ができることを見出し実行する学生の存在は心強いものである。地域の外国籍住民を誰一人として取り残さずに支援していくには、学校をはじめ、大学、地域のボランティア団体、自治体、企業などのそれぞれの立場におかれる人々による支援のステークホルダー強化が鍵となろう。こうした多方面での立場を繋ぐ役割として、HANDS事業の中でもHANDS Jr.は重要な役割を担っており、これまでの活動実績からも彼(女)らの活躍ぶりを確認することができる。



## 国際学部外国人学生体験レポート

